

508 漫録（無名人・「とらんぶ」の元祖）

〔「法学新報」第28巻8（322）号 大正7年8月20日〕

漫録

○「とらんぶ」の元祖

無 名 人

工学博士渡邊渡先生は或る所で「とらんぶ」を我邦に輸入したのは藤田隆三郎先生であるといふことを紹介された、藤田先生も往時を追懐して種種と話された

元来「とらんぶ」と云ふ名前が面白い、「とらんぶ」なる英語は札其ものでも札遊でもない又其方法でもない、札を切ること

である、此「とらんぶ」は「ぶれーいんぐ、かーど」とか礼合せに輸贏を決することは「かーど、げーむ」とか云ふのは当り前だが、我邦では「とらんぶ」と云はなければ通らぬ、一体何時何人が「とらんぶ」と云つたものだらうかと元祖の藤田先生に聴くと、先生も自分のやつた当時は「とらんぶ」とは云はなかつたと答へられ且つ

「とらんぶ」は今では其方法も忘れた位である、当時やつたのは「ほいすと」と云ふ方法が一番上品で四人の「ぱーてい」にて両方に分れてやるのであつた、「ぶりつち」だとか「べちーぶ」だとか云ふものもあつた様だが今はよく解らぬ、当時「とらんぶ」が磯野計、西松二郎、福富孝季などと云ふ腕力家即ち蛮から連の間に盛に行はれたのも妙であつた、尤も私の同級よりも下の級の方には倍増して流行した、「かーど」は私は英国から持て来たのが一組あつたが古びて居つて其時に東京には何所を索がしても無かつた、横浜で私であつたか畠山重明君であつたかが「せこんど、はんど」を一組見出して買ふたが大まい金五十銭であつた

といふことを話された、藤田先生は帝国大学第一回法科出身の法学士で裁判官と為られ神戸とか大阪其他の田舎廻りをして居られ、夫れが癩に障はられたのか又他の御都合か外務省書記官に転じて公信局次長心得などをやつて御得意の様であつたが、其内に復た元の旧巢へ帰て東京始審裁判所判事と為り控訴院判事、大審院判事より名古屋控訴院長に榮進し長い間の院長さんで中中厳格で蛮からな、どう見ても「とらんぶ」の元祖な

どとは見へなかつた

藤田先生は中央大学の創立者で講師であつて又多年幹事として熱心に尽力せられ学生に授業せらるるにも中中懇切であつたが、駄問を連発するとか、騒いだとか出席者が少ないといふと怒鳴られる、先生は正直で心切な人だけに屢々怒鳴られるそれで学校の連中は今日は雲行きが変だが亦雷鳴か桑原桑原などと云つたものだ

先生は寡黙の人であるが大学出身としては珍らしく英語が達者である、洋行されたと云ふことであるが何時何所へ往かれたのであらう、之を知つた人は少なからう、先生曰く

私は宇和島藩の生れだが父に従て明治二年大阪に出て当時の英国領事館の通訳たるアストン氏に従て英語を習ふたが、暫くして氏は東京の英国公使館に転任せられた、私は何となくアストン氏が慕はしく遂に後を追ふて東京に出て従遊することとなつた、明治三年の十二月にアストン氏は賜暇にて帰国すると云ふことに為りたれば、私も一所に英国に行きたいといふことを頼んだ、氏は親切にも船賃さへ拵へたならば、同伴して英国に帰り彼の地に到らば学校に入学させ万事世話をしてやろうとのことであつた、併し此船賃は大金で私には中工夫が附かなかつた、私は当時宇和島藩の貢進生に選ばれて月十円づつ貰つて居つたけれども、事実アストン氏の食客であれば是は其儘藩に預け置た、此等の関係から早速旧藩伊達邸の家老に駆付け右の次第を相談した、所が大に賛成されて願書を旧藩に差出し二百五十円を貰つた、而して貢進生の

手当も四十円貯つて居つたから、之で洋服其他旅装を調へ愈々二等船客として横浜を出帆し英国に向ふこととなつた恰も其際故小松宮殿下の英国に行かるるありアストン氏は途中其通訳兼世話人を託された、当時宮様に従ふものは三宮義胤、菊池大麓、河島醇などといふ人人であつた、宮殿下を始め是等の人人は一等船客で私は二等船客だが今と違ひて当時の二等船客は実に憐れなもので船中でも途中上陸したときでも、随分と虐待され香港の旅宿などでは廊下に寝かされた英国に到着してアストン氏は愛蘭人であれば同所に行き氏の食客となり、小学校通ひを始め漸く中学校をも終る様になつた、明治四年、五年と無事に過す内に廢藩置県となり、金禄公債が出て六百元を偶然にも日本政府から下賜になりてアストン氏方の食料も漸く仕払ふことを得た、其当時英国に居る学生は悉く官費であつた、友人や知人が私の境遇に同情し官費生にして貰ひたいといふことを時の全權公使鮫島尚信氏に懇請して呉れた、所が私は商人であるから留学生にすることは許されぬと断はられた、然るに私は宇和島藩の士族である商人とは怪しからぬと怒て見たが……よく考へると、成程商人と云はるる訳があつた夫れは海外旅行免状の下附を請ふ際に、士族が官命を奉じたるにあらうして海外に旅行することが出来なかつた為め、商人として商売用にて英国へ行くこと云ふことにして、旅行券を貰つたのであつた

官費留学も出来ない運命となり前途も案じられ、元來私が体も弱かつたから何となく故国が慕はしくなり、帰朝の決心を

して倫敦に出た、所が同地に小室信夫氏が居つて、三宮義胤氏を介し私に英語を教へて呉れよとのことであつた、小室氏は種種親切に話され氏の藩主蜂須賀侯や旧藩主の伊達侯などが主となりて東京から青森まで鉄道布設の計画あれば、英国の鉄道に関する法規其他の取調をせよといふことで訳らぬ乍ら之もやり英語も教へて居つた、小室氏は其内に米国を経て帰朝のことになり、私を通訳として同伴し且つ帰朝の上は鉄道の役員に採用して呉れると云ふことであつた、先づ安心と浮か浮かと芝居を見るとか甘い物を食ふとかして居る内に、兼て準備して在つた帰朝旅費は段段残り少なくなつた……得てこゝいふ時に行違が發るものだが、先是小室氏の友人で森某といふ人が倫敦にやつて来て、英語が解らぬから私に教へる様にと小室氏からの頼みであれば日日教へて居た所が、此人は横柄で何となく気に食はぬ所があつたため、私も何れ面白くないことも言つたろうと思ふ、夫が為め森が小室氏に僕の事を讒訴したらしい……一日小室氏から森を親切に世話せんければならぬと小言を云はれた、私も其儘承知したといへばよかつたのだが、予て面白くなく思つて居つたから、つい抗弁を試みた、何れそれは中中猛烈であつたのであろう、そこで小室氏が烈火の如く怒り、私に与ふべく書た小切手をめちやめちやに破り棄てて、君の様な人は爾來頼まぬと宣告された事茲に至ては進退維れ谷まるで、私もどうする事も出来ない、種種詫びたけれども、小室氏の怒は積けない、余儀なく夫人にも泣き附いた、又三宮氏や伊達宗敦氏を介して詫びたけれ

ども、私の仕事は既に古澤滋氏に託したとて、断然跳ね付けられた……私も此時から小室氏に引立てられて、実業界の人と為つたならば今頃は金持に為つて居つたろうが、当時からして金には縁遠い男であつたろう

夫れから余儀なく方を奔走して、漸く三百円程の帰国旅費を集めた、而して其当時は従僕は船賃を割引して呉れたので、私は伊達宗敦氏の僕と云ふ名義で荷物船に乗込み倫敦を出帆し、明治七年一月元旦に横浜に帰著した、そのときは囊中僅に金二円を剩すのみとは心細い次第である

倫敦滞留中に諸先輩は日本に開成学校と云ふものが出来たれば、帰朝後は同校に入る様にと教へられ三宮氏より、文部大臣に宛てた紹介状を貰て来た帰る匆匆文部省に行つた、所が時の次官九鬼隆一氏が面会され開成学校の入学志願ならば同校に行くべしとのことで、同校に出席し、入学試験を受けた、英文で論文を書かされ之れは上乘とのことなりしも、数学の試験は成績不良とあつて、一年級に編入せられた、之れが亦私の不幸で、二年級の連中鳩山、菊池、岡村、穂積氏などは総て洋行を命ぜられたが、一級下げられた為め、私は再び洋行することも出来ずに卒業後は司法官として田舎廻りを仰付けられた

こゝ聴いて見ると「とらんぶ」の元祖であることも英語の達者なこともよく解かる開成学校入学当時の先生は「とらんぶ」もやられ洋行談もあり、さぞ「ハイカラ」振を發揮されたものであつたろう